日本占領下の北京における文化人
――銭稲孫と周作人を中心に――

鄒　双　双

The Peking Intellectuals during the Japanese Occupation: Focusing on Qian Daosun and Zhou Zuoren

ZOU Shuangshuang

Peking was under the control of the Japanese army for an eight-year period, from 1937 until the end of the Sino-Japanese War in 1945. Faced with the difficulties of the Japanese Occupation and the cultural upheavals of this period, many authors and intellectuals left the city, and several leading universities relocated to South China. There was, nevertheless, a small population of the cultural elite who remained in Peking and withstood the constrained environment.

This paper considers the wartime consideration and activities of the translator Qian Daosun (1887−1966) through an examination of sources in Japan and China. Qian participated in the Great East Asia Writers Congress; however, he was not deeply involved with their activities. His primary reasons for having remained in Peking were: a sense of affinity with Japan that began as an overseas student to Japan in his youth and continued with his close relationship with the Japanese Ministry of Foreign Affairs, his family dependents, his having established the Quanshou Collections of Eastern Books based on books he had collected over many years, and finally his lingering affection for his translation activities at the Beijing Library of Modern Science. According to sources written by people who knew Qian during the war, he underwent a psychological change with the collapse of Sino-Japanese relations, and considered moving to the country. After psychological conflict, he decided to remain in Peking and held a post at the Japanese-run Peking University where he preserved Peking's books in his own unique way. In order to clarify the hidden lives of the literati in Peking during the Japanese Occupation, this research also touches

upon Zhou Zuoren, a figure resembling Qian and also seen as being a pro-Japanese literati.

1. 日本占領下の北京に置かれた文化人

1937年７月７日に日中戦争の全面開始を意味する「盧溝橋事件」が勃発した。３週間後の７月29日、北京も日本軍に攻め落とされた。北京に入った日本軍は、直ちに政治支配のため「平津治安維持委員会」という一時凌ぎの機関を設置し、次いで12月14日に湯爾和を首脳とする「臨時政府」の成立を宣言する。そして翌年５月４日に「北支那開発株式会社」を成立するに至った。このように、１年も経たないうちに、日本は北京で政治、軍事、文化、経済体制の枠組みをほぼ確立した[1)]。文教界においても激変が生じて多くの教育施設の移転や文化人の離散を余儀なくされた。北京で20数年に及んで盛り上がりを見せた新文学運動も姿を消して文壇は静寂に沈んだ。しかしながら、日本の占領下にもかかわらず、各各の事情によってあえて北京に踏みとどまった文化人もいた。彼らは日中戦争の終了までの８年間、自分なりの抵抗を模索し、沈黙、服従、あるいは協力の姿勢を示し、さまざまな振る舞いを見せた。また、その行動によってそれぞれの戦後の運命も大いに異なる。詩人南星は1946年に、次の如く記している。

> 昨年秋、まだ記憶にあるかもしれないが、北平に留まった人たちもほっとした。が、ほっとするところではないようだ。それらの人たちは直ちにまた容赦ない棒で打たれ、幻想から目覚めて新しい現実を思い知らされた。彼らは以前ひそかに憤慨したり希望したりすることができたが、昨年の後半年になってはじめて自分が無期懲役の受刑者だ

1）郭廷以編『中華民国史事日誌』（第三冊）、台北：中央研究院近代史研究所、1984年を参照。

とわかった。[2)]

ここで記されている「無期懲役の受刑者」となった人たちは、日本占領下の北京に留まり、何らかの形で日本の北京支配に協力したという疑いで「漢奸裁判」にかけられた人たちである。「漢奸裁判」とは、終戦直後から1947年10月まで、国民政府が中国大陸で戦争中に日本へ協力した中国人を対象に、数万人の規模で実施した裁判である[3)]。

文化界においても「漢奸裁判」が執行されて、もっとも関心を集め、論争の俎上に上がったのは周作人である。彼は３度に亘る審判を受けた結果、「懲役14年」という判決を言い渡された[4)]。その後、漢奸として北京の街を後にして南京の獄に繋がれていた。中華人民共和国が成立した後、ようやく獄中生活から釈放されたが、「文化漢奸」という汚名に長く付きまとわれた。長い時間を経た1980年代に、彼の日本軍に服従した動機と行動を弁明し、「文化漢奸」の汚名を凌ごうとする人が現れてマスコミの注目を集めた。それがきっかけで魯迅博物館は「敵偽時期周作人思想、創作研討会」を開き、周作人研究ブームを引き起こした。また、1987年に同館開催の「魯迅、周作人比較研究学術討論会」を経て、2003年に「周作人研究的歴史、現状及出版工作座談会」が開催され、20数年間の研究をまとめて周作人研究に一段落を付けた。現在、周作人研究は独立した学問として確立して彼についての研究論文や著作は膨大な数に上る[5)]。

しかしながら、盛んに研究されている周作人に反し、それほどまでに著

2）去年秋天，或者有人还记得，留在北平的人也都透过一口气来了。而那一口气又似乎不应当透过来，于是那些人很快地就被迎头一棒打下去，让他们离开幻想认识了新的现实。他们从前可以偷偷地愤怒，偷偷地希望，到去年下半年他们才发现自己已经是被判了无期徒刑的囚徒。（張泉『淪陥時期北京文学八年』、中国和平出版社、1994年、「序言」、２頁）

3）劉傑『漢奸裁判』、中央公論新社、2000年７月を参照。

4）1946年10月26日付の『大公報』。

5）孫郁、黄乔生編『回望周作人―是非之間』、開封：河南大学出版社、2004年、「序言」4-5頁。

名ではなく「文化漢奸」という疑いを持たれた多くの文化人たちには、あまり十分な関心を払われなかった。日本占領期の北京文学について中国では張泉、日本では杉野要吉といった研究者は関心を寄せたが[6]、日本占領下の北京にいた個人に関して研究されたのは小説家梅娘、張我軍という程度に過ぎない[7]。このような人々に関する研究は、当時の文化人のありようを明らかにするだけでなく、北京における日中両国の文化交渉、そして戦後にまで続く北京文学の足跡をたどる重要な作業だと考えている。そこで本稿では、「文化漢奸」として歴史に埋没され、人々に忘れられがちであった文化人達のうち、翻訳家銭稲孫を取り上げて検討する。

2. 忘れられた銭稲孫

2.1 銭稲孫について

銭稲孫は1887年に浙江省で清末の外交官銭恂（1853-1927）と詩人単士厘（1858-1945）の長男として生まれる。単士厘は近代的な識見を備えた女性のさきがけとしていまなお高く評価されている。銭恂は、湖広総督張之洞（1837-1909）に仕え、湖北から日本へ派遣される留学生の監督官として1899年に来日する[8]。銭稲孫は翌年に父の下へ向かい、日本で７年間の教育を受ける。1907年、父の転勤でイタリアやベルギーに渡り、大学課程を終える。帰国後、銭稲孫は中華民国の教育部に勤務し、魯迅に同僚となって親交を結ぶ。1928年、清華大学の講師として招かれ、日本語や日本歴史を講じる

6）張泉『淪陥時期北京文学八年』（1994年、中国和平出版社）、杉野要吉編『淪陥下北京1937-45：交争する中国文学と日本文学』（2000年、三元社）といった研究成果がある。

7）張我軍に関しては田建民『張我軍評伝』（北京：作家出版社、2006年）などある。梅娘については、張泉編『梅娘小説散文集』（北京出版社、1997年）と『尋找梅娘』（明鏡出版社、1998年）のほか、多数の論文がある。

8）邱巍『吴興銭家：近代学術文化家族的断裂与伝承』（浙江大学出版社、2010年）は銭恂の来日時間を1899年としたが、高木理久夫「銭恂年譜」（『早稲田大学図書館紀要』56号、2009年３月）は1898年とする。本論では邱巍説に従う。

傍ら、図書館関係の仕事や翻訳も兼ねる。日中戦争勃発後は、北京に残り、いわゆる「留平文人」[9] の一人となる。終戦後、日本の文化侵略に加担したという理由で法廷に立たされ、「文化漢奸」の罪名で投獄された。1949年出獄するものの、1966年に亡くなった。

銭稲孫は、20世紀初頭から死去するまで数十年にわたって翻訳活動を続け、文学をはじめ、歴史、考古、美術、医学といった多分野の訳作を後世に残したが、殊に文学翻訳に大きく寄与した。中国において初めてダンテ『神曲』の中国訳を行ったのみならず、万葉歌の中国訳において先駆者的存在で『漢訳万葉集選』（日本学術振興会、1959年）をもって『万葉集』の初めての中国語訳本を刊行した。また中国古典小説『紅楼夢』のような格調に倣って『源氏物語』の中国訳を試みた。ほかに、『日本詩歌選』（東京文求堂書店、1941年）、『櫻花国歌话』（中国留日同学会、1943年）、『木偶浄瑠璃』（作家出版社、1965年）、『近松門左衛門　井原西鶴作品選』[10] といったような訳作があり、日本文学の翻訳に大きな足跡を残した。

2.2　銭稲孫研究の現状

結論から言えば、銭稲孫研究は周作人研究よりはるかに遅れている。日本では、銭稲孫は『万葉集』の翻訳家であるだけに、訳著『漢訳万葉集選』が幾度となく取り上げられて、翻訳史や異文化体験といった視座から研究されている[11]。ただ、銭稲孫その人に対する研究は現在でも皆無である。一

9）戦中、北京に踏みとどまった文化人を指す。

10）1987年に人民文学出版社の『日本文学叢書』、1996年に人民文学出版社の『世界文学名著文庫』（精装）に収録されている。

11）鄒双双「佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究―成立背景、出版事情、翻訳をめぐって―」（『東アジア文化交渉研究』2011年３月第４号、97-115頁）、吴衛峰「和歌の翻訳と異文化体験の問題―銭稲孫著『漢訳万葉集選』を中心に」（『東北公益文科大学総合研究論集』2007年６月３日第12号、59-72頁）、松岡香「『万葉集』の中国訳について（その１）―銭稲孫訳を考える」（『北陸学院短期大学紀要』1989年12月第２号、1-11頁）などある。ちなみに、中国には甄文康「銭稲孫的归化翻訳思想論―以『漢訳万葉集選』為中心」（四川大学2007年修士論文）といった論考が

方、中国では、20世紀において銭稲孫はほとんど注目されなかった。このような状況は、「文化漢奸」による研究者の敬遠だけでなく、中国国内に銭稲孫に関する資料が極めて少ないことに起因している。21世紀以降、研究資料の公開とデータベース化により資料閲覧と収集が相当便利になってきたため、銭稲孫研究はようやく動き出した。しかし、王文歓、邱巍の数点の論考が挙げられるのみである[12)]。

このような状況の中で、筆者は日本で発見した銭稲孫書簡や、日本人の銭稲孫に関する記述などの資料を利用して、主に銭稲孫の翻訳活動や彼の交友関係について論じてきた[13)]。しかし、日本占領期の北京における銭稲孫の活動、その理由、及び彼の真の思惑などに関しては、未だに明らかにされていない。そこで、本論では先行研究を踏まえて、銭稲孫研究において一番の難点と思われるこれらの問題を追究する。

3.「文化漢奸」の「実」——戦中における銭稲孫の活動

冒頭で述べたように、戦中多くの文化人が南方に撤退することに対し銭稲孫は北京に踏みとどまることにした。それから終戦までの8年間において銭稲孫の経歴を概括してみる。

1937年12月に日本軍部の要請で湯爾和を首班とする中華民国臨時政府が

ある。

12）王文歓「銭稲孫対日本文化的訳介評述」（北京师范大学中文系2006年修士論文）は銭稲孫の役作に対し基礎的な整理を行った。邱巍「銭稲孫：生平・学術和思想」（『呉興銭家：近代学術文化家庭的断裂与伝承』、浙江大学出版社、2009年）は銭稲孫の家柄と家庭環境を明らかにした。

13）「佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究ー成立背景、出版事情、翻訳をめぐってー」（『東アジア文化交渉研究』第4号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2011年3月）、「銭稲孫と日本文人の交遊ー谷崎潤一郎と岩波茂雄を中心に」（『国文学』第96号、関西大学国文学会、2012年2月刊行予定）、「銭稲孫和北京近代科学図書館」（『河南大学学報』にての掲載受理済み、刊行未定）、及び書簡翻刻の「銭稲孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯ー佐佐木信綱宛銭稲孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通ー」（『国文学』第95号、関西大学国文学会、2011年2月）など。

樹立される。翌年１月、銭稲孫はこの臨時政府によって作られた新民学院で講師として就任する。２月９日に『大阪毎日新聞』主催の「更生中国文化建設座談会」に周作人と共に列席する。同月から９月まで、臨時政府は、旧国立北平、北京、清華、交通の四大学（の抜け殻）を整理、統合して「国立北京大学」とし、湯爾和がひとまず校長を兼任し、医、農、理、工の四学院を発足させる。1939年１月に「北京大学」[14] で銭稲孫は秘書長に就き、周作人は図書館館長に就任する。1940年３月に日本の傀儡政府汪兆銘政府が成立し、11月に湯爾和がなくなったため、周作人は河北政務委員会教育総署督弁に就任し、銭稲孫は図書館館長を兼任するようになる。そして４月から秘書長から昇任して「北京大学」学長を務めはじめる。1942年の第一回、1944年の第三回大東亜文学者大会に参加して発言する。1944年に「北京大学」文学院に学生が日本教授金西春秋を殴打する事件が発生するため、学長の職務を免職され、文学院院長に左遷される。

以上が「文化漢奸」を定められた理由となる銭稲孫の大方の活動である。ここではとりわけ「更生中国文化建設座談会」、そして大東亜文学者大会への参与を詳しく見ていきたい。

3.1　更生中国文化建設座談会

「更生中国文化建設座談会」について1938年２月16日付の『大阪毎日新聞』には詳報がある。「更生支那の文化建設を語る」という大きな見出しの傍らに「まづ打倒すべき唯我独尊の態度　共産主義と闘う新民会の方案　緊急に学制を立直せ」という副題が付けてある。主催者の意図は一目瞭然である。参加者として

> 日本側―大使館参事官森島守人、新民学院教授法博瀧川政二郎、軍特務部成田貢、軍特務部武田熙

14）本論では日本の要請で設立された「国立北京大学」を「北京大学」で統一する。

中国側―〔臨時政府〕議政委員長兼教育部総長湯爾和、新民会副会長張燕卿、前華北大学校長何其鞏、北京大学教授周作人、清華大学教授錢稲村(ママ)

の名が連なっている。錢稲孫は座談会で

私も周先生とおなじような意見です、たとひみつちりやつた積りで三、四年間北京で学んでもやはり日本に行かなければ駄目です、北京には日本語を教授する中学校が一つもありません、中学時代に日本語を教へることは必要だと思ひます。

と述べ、周作人の発言に倣ったような感じであった[15]。当り触りのない発言と思われるが、当時は何を発言するかより出席するかどうかが問題にされた。1938年5月5日に武漢の「中華全国文化界抗敵協会」は全国に向け、「周作人錢稲孫およびその他のいわゆる「更生中国文化建設座談会」に参与したもろもろの漢奸を、即時わが文化界の外へ駆逐し、よって精神的制裁を明らかにすべきである」[16]と、二人を文化界より駆逐せよという趣旨の檄電を発した。それは、参加する理由以前に、出席そのものが「通敵叛国」たる行為と見なされたからである。

15）周作人の発言は次のようである。「私は長らく東洋文学、日本文学系の仕事に携はつてきましたが、実は当初からの考へを申しますと出来るだけ支那の学生に日本文学を通じて日本を研究させたいとこのために折角日本文学の講座を設けて貰つたのでしたが……今日まで十年の経験からは残念ながら芳ばしいものではありませんでした、やはりちょつとでも日本に行つて学ばなければ駄目です、こちらでは日本の政治等をどう見るべきかくらゐ教へてどん〳〵日本に行かせるのが一番いゝと思ひます。」（1938年2月16日付『大阪毎日新聞』）

16）木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』、岩波書店、2004年、93頁。なお、中国語の原文は『文摘戦時旬刊』1938年5月5日に所載されている。

3.2　第一回大東亜文学者大会

大東亜文学者大会は、徳富蘇峰を会長に、久米正雄を常務理事とする日本文学報国会によって主催された。日本文学報国会は、情報局第五部三課の指導監督下に立つ政府の外郭団体として1942年５月に発足し、「全日本文学者ノ総力ヲ結集シテ、皇国ノ伝統ト理想トヲ顕現スル日本文学ヲ確立シ、皇道文化ノ宣揚ニ翼賛スルヲ以テ目的ト」[17] して、『日本学芸新聞』を機関誌とする。大東亜文学者大会の計画が、報国会において取り上げられたのはその設立の直後であった。「大東亜戦争のもと文化の建設といふ共通の任務を負ふ共栄圏各地の文学者が一堂に会し共にその抱負を分かち互に胸襟を開いて語らう」[18] というのが大会の趣旨である。

第一回の大会は1942年11月に東京と大阪で開かれたが、1943年８月に東京で第二回が開かれ、1944年の第三回は南京で開催された。第一回大会の参加者は、日本代表57名（台湾及び朝鮮の代表９名を含む）、大会参与74名、満・蒙・華代表21名である。第二回大会は、日本代表99名（台湾、朝鮮の９名を含む）、満・蒙・華代表26名。南京で催された第三回大会は、日本代表14名（朝鮮の１名を含む）満・蒙・華の代表は54名であった。第四回は「満州国」の首都新京（長春）で、1945年秋に開催される予定であったが、日本の敗戦によって実現しなかった[19]。大東亜文学者大会に関してはすでにさまざまな視点から論及されているため[20]、ここでは銭稲孫が出席し

17）櫻本富雄『日本文学報国会　大東亜戦争下の文学者たち』、青木書店、1995年、81頁。

18）日本文学報国会編纂『文芸年鑑　二六〇三年版』、桃蹊書房、1943年８月、33頁。

19）尾崎秀樹『近代文学の傷痕―大東亜文学者大会・その他―』、東京：普通社、1963年、６頁。

20）前掲尾崎秀樹『近代文学の傷痕―大東亜文学者大会・その他―』以外に、楠井清文「大東亜文学者大会の理念と実相―第一回大東亜文学賞受賞作・庄司総一『陳夫人』を視座として」（『日本近代文学』76号、2007年５月、153-168頁）、梅定娥「古丁と「大東亜戦争」―大東亜文学者大会と三つの作品をめぐって」（『日本研究』32号、国際日本文化研究センター、2006年３月、119-148頁）、郭偉「袁犀『貝殻』と大東亜文学者大会次賞―中薗英助「北京の貝殻」におけるその意味」（『比較文学』43号、2001年３月、90-105頁）、張欣「中国人作家の“帝都”東京体験―張我軍と『大東

た第一回と第三回を取り上げることにしたい。

第一回大会の準備委員の中で、中国の事情に精通した奥野信太郎と南京政府宣伝部に所属した草野心平が入っている。周作人と銭稲孫は奥野信太郎に尊敬されたため[21]、代表者として目されても当然であろう。まして、名の通った本当の文学者がほとんど北京を離れた状況下で、周作人と銭稲孫は北京文芸界の「巨星」とされるような存在であった[22]。実際、周作人は第一回の大会に「中華民国」の代表予定者とされたが、開会のメッセージを寄せただけで行かなかった。それからの二回にも参加しなかった。結局、第一回の参加者は当初の予定とは少し違い、銭稲孫は団長として、張我軍、周化人、柳雨生などを引率して出席することになった。

第一回の際、代表者たちは11月３日から13日にかけて会議を参加し、各地の見学、見物をした。４日の開会には「ずらりとならんだ洋服と和服の人」に反して「ただひとりの支那服は赭顔の銭稲孫氏である。」[23] そして、11月15日付の『日本学芸新聞』に、「大東亜精神の樹立」という議題を巡る代表者たちの発言が掲載されている。銭稲孫の発言については、次のように報じられている。

> 今回この大会に列席致しました私は、その資格がないことを甚だ痛感致してゐるのであります。元来私は文学者と申上げる程の者でありませんが、簡単にこの大会についての目標を申上げたいと存じます。この大東亜戦争が確立した暁われわれの東亜精神をあく迄も発揮して行くことが必要だと思つてゐます。只今斉藤さんからこの東亜の精神につきまして非常に明澄なお話を伺ひ、私としてはこれに蛇足を加へ

亜文学者大会』」（『アジア遊学』13号、2000年２月、101-115頁）など。

21）奥野信太郎「周作人と銭稲孫」（『北京随筆』、第一書房、1940年３月）を参照されたい。

22）1941年４月15日付の『東京朝日新聞』（朝刊）は東亜文化協議会のために来日した周作人と銭稲孫のことを「中国文壇の巨星入京」と報じた。

23）実藤恵秀「文学者大会に参列して」、1942年12月１日付『日本学芸新聞』。

る必要がないかと存じますが、たゝこゝ一言に申上げたいのは、この東亜の文化には三つの鼎ともなるものがあると思ひます。

その第一には、わが中華民国は四海兄弟の精神をもつて居ます。又日本は八紘為宇といふ精神を持つて居られます。それから更に第三には一蓮托生。この三つの精神をもつて、お互ひに一視同仁と思つて今後進んで行きたいと痛切に考へてゐます。元来、西洋文化利益を本にとしてゐます。これに反して、わが東洋文化は道義を本としてゐます。要するに大東亜戦争は文化の戦争であり、東洋の道義を押し拡げ、西洋まで及ぼすのが、この大きな目的だと確信いたします。先程申上げた通り、われわれ文学者の立場から考へれば、東亜民族はお互にその美を発見し尊敬し合ひ、堅く手を握つて、東亜の精神を樹立し、全世界にこれを波及するのが、この際最も緊要であると思ひます。要するにお互に一視同仁のこの道義に立脚して進んで行くことが大切であります。

真っ先に、銭稲孫は自分が文学者ではないため、大会に参加する資格はないと言明した。それは演説に多く見られる謙遜な前触れであると思われる。一方、銭稲孫の参加意欲は積極的ではないとも察せられる。ここで、彼は日本の「八紘為宇」に対し中国には「四海兄弟」があることを挙げ、東亜民族は互いに「尊敬し合ひ」、「一視同仁」の道義に立脚すべきだと強調した。実際、似通った発言は大会前に日本に赴く学生へのメッセージにも見られる。

元来、「天下大同」は中国古来の一つの大理想である。国を治めて天下を太平にすることの極めは「天下大同」にある。「四海兄弟」「四海一家」といった言い回しは、みんなこの大理想の表れである。しかもこの理想は東亜人に共有されている。日本では古くから「八紘一宇」をもって理想とする。仏教で言う「衆生をもれなく救済する」「一蓮托

生」も同じ理想を指す。現在の時局は、東亜各民族の共通の大理想に向かって僅かな一歩を踏み出すところであると言える。いわゆる大東亜戦争の意味はここにある。[24)]

このように、大会での発言とほぼ同様の姿勢が窺える。つまり、銭稲孫は大会のために念入りな発言の準備をしたわけではなく、日頃の考えを述べたのである。彼は、真に大東亜戦争が東亜各民族の「天下大同」という理想を実現することができると信じて、東洋と西洋との対立を認識したが、日中間の衝突を十分に理解していないようであった。

ただし、一見、そのような考えは日本の掲げる「大東亜文学」に同調していたかのように見えるが、同じではなかった。大会開催前の11月２日の『東京朝日新聞（朝刊）』に「日本国民に寄す　大東亜文学者大会に際して互ひの美を見出せ」という銭稲孫の文章が掲載されている。

十年もこのかた、私はお互に地を易えて相処して見ねば、即ち我が国の人もお国の人となつて見る心持で、またお国の人も我が国の人となって見る心持で相接し、物事をその心持で考えるやうにならなければ、本当の同情、従つて理解が出来ないのではないでせうかと申して参りました。一時は優越感といふことをしきりに戒められましたやうですが、それも本当の同情が持てるやうになれば、問題にならぬことかと思はれます。

近頃は、我が国の現代文学を沢山お国で訳して戴いたことを私は深い深い欣びでお迎へ申してゐます、お国の文学をもこちらでは、とに

24）原来「天下大同」是中国古来的一个大理想。治国平天下的极致要在「天下大同」。什么「四海兄弟」「四海一家」等等的说法，都是表现着这个大理想的话。这个理想，而且还是凡为东亚人所共具的。日本，古来就取「八纮一宇」四字为其理想；便是释家的所谓「普济众生」「一莲托生」，也正是一样的理想。现在的世局，可以说是正在向着这东亚各民族所共同的大理想才迈出了第一步。所谓大东亚战争的意义，就在于此。（銭稲孫「在学園門口的臨別贈言」、『中和月刊』第３巻第８期、1942年８月、12頁）

かく翻訳もしてゐますが、なお一段と勉強する必要があるやうです。現代文学から現代の感情を汲まれ、そこから湧いて来る同情こそ真の理解になり、また真にためになる忠告も与えてくれるようになると、私共は実はお国の方々にそれを期待してゐるのであります、お互に早合点を慎みたいとひそかに思ってゐます、お互の美を発見することが肝腎でそれは感情移入からと思ひます。

銭稲孫は互いの立場を代えて考える心持で、同情をもって互いの美を見出すように提唱した。とりわけ、「優越感」を戒め、「早合点を慎みたい」という見地は、「満州」代表の「東亜文学就中日本文学が世界に光彩を放つであらう」、朝鮮代表の「八紘一宇日本の肇国精神を十億の民衆に徹底させる、そのために日本語の普及といふことが非常に必要である」、そして台湾代表の「日本語を通しての民族と民族との融合」といった発言に対し、尾崎秀樹に「それがきばらものだけに、日本の力み返った態度に痛烈な批判として響く」と評された[25)]。なぜなら、大会にほかの言葉に日本語の通訳をつけるものの、日本語に通訳をつけないという日本の優越感に満ちる運営方法が押しつけがましかったからである。言い換えれば、銭稲孫の描いた「東亜文化」は日本の一方的な押しつけではなく、互いを尊重し合う理解である。

開会式で中国服を着装し、大会で「一視同仁」を力説したこと、そして「互ひに美を見出せ」の発表などは、明らかに異民族支配の中で銭稲孫が自民族文化の尊厳を維持しようとしたことを示している。そして、彼は真に東亜の平和を平等な立場による文学、文化の相互理解に求める理想を抱いたのではないかと思われる。

25）前掲尾崎秀樹『近代文学の傷痕―大東亜文学者大会・その他―』、14頁。

3.3　第三回大東亜文学者大会

第三回目の大会は1944年11月12日より３日間南京で開かれた。その少し前の７月に、サイパイ島の日本軍が全滅して東條内閣は総辞職、10月に神風特別攻撃隊がフィリピンの戦場に出陣した。敗戦の気配がますます濃くなったうえに、会場は日本から離れたため、華やかな第一回目に比べて日本側の新聞紙における大会の報道はかなり減少した。

今度も、周作人は「高血圧のため」[26] という理由で欠席したため、銭稲孫は華北代表を引率して南京に赴いた。銭稲孫は、初日に中日文化協会常務理事の陶晶孫と、それぞれ議長、副議長に満場一致をもって推薦、可決され、大会宣言を起草した。しかし、３日目の閉会に先立ち正式に発表された宣言は、銭稲孫の草案を不適宜と判断し訂正を加えたものである。『日本学芸新聞』の報道からその経緯が分かる。

> 宣言文に就て、起草委員たる日本三代表〔引用者注・阿部知二、高見順、北條秀司〕は提示されたる主催者側起草原案に対し若干の異議あり、慎重に検討審議の後修正案を提示し、之を通過せしめたり。異議の点は中国側原案には大東亜戦争の目的完遂に関して一言も言及する所なく（後略）[27]

銭稲孫の起草した宣言には大東亜戦争についていっさい触れていない。つまり、彼は今回において第一回と同様に、主導権を握る日本側の顔色を伺いながらの発言をしなかった。

実際、中国側の代表はみなあまり意気込みを見せなかった。この様子については、日本代表の高見順が武田泰淳に向って語った次の言説からも垣間見ることができる。

26）長与善郎「無駄にならぬ誠意・文化交流に撓まぬ一歩」、1944年11月20日付『東京浅い日新聞（朝刊）』。

27）「第三回大東亜文学者大会報告」『日本学芸新聞』第43号、1945年１月１日。

支那の作家は、上海在住の奴も、北京から来た奴も、みんな日本の国策に順応した発言を、一つもしやがらないんだ。文学者の生活をどうしてくれるという、日常の心配のことしかしゃべらない。ともかく徹底しているんだ。彼らは精神をこわばらせるということが、てんで無いんだな。汪主席が死んだおかげで、一応おとなしくはしていたものの、自分たちだけになれば、大いに飲み、大いに喰ってるんじゃねえか。俺はわからんよ。中国の文学者を好きになったらいいのか、嫌いになったらいいのか、わからんよ。正体がつかめんよ。[28)]

戦時下の生活でさえ困難な状況の中で、参加しても日本側の期待していたような発言ではなく、日常の苦しさを訴えるのは無理もないだろう。これらの資料からだけでは、銭稲孫が、大東亜文学者大会に消極的に出席したことはわかるであろう。

4.「対日協力」した理由

本論の冒頭で述べたとおり、周作人の「対日協力」の理由について、80年代にすでにさまざまな視点から白熱した議論が繰り広げられていた。結局、「文化漢奸」のレッテルを完全に剥がすことはできなかったが、日本協力の理由は明かされた。一方、多様な研究に現れた研究者の心理について董炳月は次のようにまとめた。

歴史研究の中で、学者の心理状態は二通りに分けることができる。一つは上からの目線で研究対象を裁判するかのようで、とりあえず「裁判官心理」と称する。もう一つは努めて研究対象の具体的な状況から出発して研究対象を理解しようとするため、とりあえず「弁護士心理」

28）武田泰淳「上海の螢」、『武田泰淳全集　第十八巻』筑摩書房、1979年、187頁。

と称する。抗日戦争時期の周作人に関する研究の中で、「裁判官心理」を持つものは、「弁護士心理」を持つものより明らかに多い。裁判官はもとより裁判から、裁判する権利を握る崇高感と良い道徳を持つ役目を演じる時の崇高感、という二重の崇高感を得ることができるが、いずれも学術的ではない。[29)]

董炳月は「裁判官心理」という上からの目線と、「弁護士心理」という客観的な立場で研究を行う研究者の姿勢があると述べており、周作人研究においては、「弁護士心理」的な姿勢で研究する方が、学術的であると指摘している。そこで、筆者は人間、歴史を尊重する立場に立ち、董炳月の言う「弁護士心理」を持ちながら銭稲孫が北京に留まった理由を考えてみる。

4.1　青少年期からの対日認識

前述したように、銭稲孫は1900年に来日し、13歳の時から７年間、人間形成や思想形成に大きく影響する青少年、青年時期に日本で滞在して日本式の教育を受けた。小学校時代を過ごした慶応義塾幼稚舎は、1874年に、福沢諭吉の委嘱を受けた門下生の和田義郎が、年少者の塾生を集めて教育を行ったのが始まりである。周知の通り、日本で最も古い私立小学校の一つである。その後、銭稲孫が通った成城学校は、陸軍の育成所として清国から派遣された数多くの留学生も受け入れていた。文科と理科が設置してあるが、銭稲孫は文科に入ったと思われる。次に日本の最初の高等師範学校とされる東京高等師範学校に進学した。７年間の滞在を通じて銭稲孫は

29）在历史研究中，学者的心态大致可以分为两种。一种是居高临下、对研究对象加以审判ー姑且称之为“法官心态”。一种是努力从研究对象具体状况出发，理解研究对象ー姑且称为“律师心态”。在有关抗日战争时期周作人的研究中，显然是持“法官心态”者众而持“律师心态”者寡。审判者固然可以在审判中获得崇高感ー握有审判权的崇高感与扮演正面道德角色时的崇高感，但这种崇高感却是非学术的。（董炳月「周作人的“国家”与“文化”」、孫郁、黄乔生編『回望周作人 是非之間』所収、開封：河南大学出版社、2004年、264頁）

知識の吸収以外に、日本教育制度を含む日本社会を親身で感じ取ったはずである。成城学校では日本の軍事的実力をも思い知らされたと考えられる。幼少時に中国で育ち、留学のためだけに1906年より５年間日本に滞在した周作人は東京を第二の故郷とし、日本の生活スタイルを受け入れたが[30]、銭稲孫は青春期を日本で過ごしたのである。彼にとって日本は正真正銘の第二の故郷であるとも言えよう。したがって、成年後に来日した周作人に比べ、銭稲孫の日本に対する認識には理性より感性的要素が大きいと考えてもよい。彼の日本、日本人に対する感情は、普通の留学生よりさらに深いと思われる。

4.2　戦前における日本外務省との関係

銭稲孫は日本、ヨーロッパ留学を経て帰国して、1927年までに中華民国政府で勤務していた。この時期には美術にすこぶる興味を持ち、直接日本書物の翻訳には関わらなかった。1928年より清華大学外文系の講師に、1932年外文系と歴史系の教授になり、「源氏物語」、「第一年日本文」、「第二年日本文」、「日本通史」などの授業を受け持つようになった[31]。このような転職によって、彼は日本事情にさらに詳しくなり、日本関係の訳作も急増し、授業の講義や[32]、宗教学、考古学関係の翻訳をするようになった。例えば、1930年に清華大学特別出版物として出版された「从考古学上看日中文化底交渉」は原田淑人[33] が清華大学での講義記録を訳したものである。また、池内宏[34] の「満洲国安東省輯安県高句麗遺跡」は銭稲孫が1936年に日本で休

30）袁良駿「周作人研究的三口陥阱」、孫郁、黄乔生編『回望周作人 是非之間』所収、開封：河南大学出版社、2004年、220頁。

31）齐家莹編撰『清華大学人文学科年譜』、清華大学出版社、1999年、69頁。

32）例えば「狂言记」、『日文与日语』創刊号、1934年１月；「名作名訳対読講義」、『日文与日语』第１巻第10、11、12期、第２巻第１、３期に掲載されている。

33）原田淑人（1885-1974）日本の考古学者、東大教授、浜田耕作らと東亜考古学会を設立。「日本近代東洋考古学の父」と呼ばれる。

34）池内宏（1878-1952）大正・昭和時代の東洋史学者。特に東北アジア史学の第一人者。東北アジアの歴史上の諸問題を合理主義と実証精神および史料批判を通じて解

暇を過ごした時に訳したものである。しかも、「自ら進んで事に当られたのである」[35] という。

訳著の傾向のみならず、外務省所蔵文書より確実に銭稲孫と日本の親密な関係を証左できる。資料によれば、1931年４月、京都帝国大学教授三浦周行が北平大学、女子師範大学などの大学で「日本法制史」と「明治維新史」を講演した時、銭稲孫は通訳をした。外務省は、「三浦教授ノ彼地ニ於ケル講演ハ支那学界ニ好影響ヲ与ヘ対支文化事業トシテ最モ有意義ニ有之同教授ノ申出ハ事情已ムヲ得サルモノト認メラルルヲ以テ昭和六年度対支文化事業特別会計事業費ノ項講演及視察費ノ目ヨリ金六十五円也ノ額ヲ通訳手当トシテ銭稲孫ニ支給スルコトト致」して、彼に報酬を支払ったという[36]。1932年銭稲孫は日本視察の機会を与えられ、日本での講演料及び視察費として800円給与された[37]。1934年４月、清華大学教授劉崇鑛と共に、清華大学大学生28名を引率し、３週間にわたる日本訪問をすることに際し、外務省から視察補助を受けた[38]。同年８月に、銭稲孫は、再度学生30名を率いて来日した[39]。1935年、山東済南斉魯大学教授斉樹平と一緒に奈良正倉院参観の権利を与えられた[40]。1936年資料調査に来日した期間中、東京から、東北地方、北海道、近畿地方、そして中国、九州地域に赴いた旅行視察費

明し、多くの学問業績を残した。

35）池内宏「弁言」、池内宏著、銭稲孫訳『満洲国安東省輯安県高句麗遺跡』、新京満日文化協会、1936年。

36）アジア歴史資料センター：B05015753300「満支人本邦視察旅行関係雑件／補助実施関係第十一巻」の「清華大学教授銭稲孫」。

37）アジア歴史資料センター：B05015755300「満支人本邦視察旅行関係雑件／補助実施関係第十二巻」の「清華大学教授銭稲孫」。

38）アジア歴史資料センター：B05015766400「満支人本邦視察旅行関係雑件／補助実施関係第十四巻」の「北平清華大学教授銭稲孫及教授劉崇鑛昭和九年三月三一日」。

39）アジア歴史資料センター：B05015853300「満支人本邦視察旅行関係雑件／接待費並案内費関係雑集第一巻」の「北京清華大学教授銭稲孫外学生等案内料昭和九年八月」。

40）アジア歴史資料センター：B05015788200「満支人本邦視察旅行関係雑件／便宜供与関係第八巻」の「済南斉魯大学美術史教授斉樹平正倉院拝観昭和十一年七月」。

は、いずれも日本外務省からの出費である。[41] このように、銭稲孫はしばしば日本を訪れ、その多くの活動費用も日本外務省から賄われたのである。それらの活動は彼と日本政府の親密関係を十分に示している。

4.3　家庭状況

周作人は、「家累」（家庭の係累）で北京に留まったのだと訴えた。それはただの口実だと反発する学者がいる。なぜなら、家族を取り残して単身で奥地へ移った事例もあれば、大家族を連れて共に旅の心労を嘗めたケースもあるからだという主張である。銭稲孫に限って言えば、家庭の係累は一つの要因とも考えられる。

銭稲孫には十六人の子どもが生まれたが、生存したのは十人である。うちの五人は日本に留学したことがあるという[42]。その大家族の家長として銭稲孫の責任が重大であることは言うまでもない。戦中における銭稲孫の家庭状況について友人岩波茂雄宛の書簡から垣間見ることができる[43]。封筒が残存しないため年度が分からないが、内容から1937年と思しき書簡（８月12日付）には

> 只今子供等通信断絶の所　摯友松村先生帰国の便に託し金四百五十円学費として渡付以来申置き候へども　前途不明にて小生も失業　学業支給の途万一絶ゆる場合あらば　何卒面倒見遣被下度　御恩忘るゝことあらじと堅く念じ居り　小供等もその心得なき筈はなきなりと信じ居り候

41）アジア歴史資料センター：B05015766400「満支人本邦視察旅行関係雑件／補助実施関係第十七巻」の「清華大学教授銭稲孫」

42）前掲邱巍「銭稲孫：生平・学術和思想」、221頁。

43）詳しくは拙論「銭稲孫と日本文人の交遊ー谷崎潤一郎と岩波茂雄を中心に」（『国文学』第96号、関西大学国文学会、2012年２月刊行予定）を参照されたい。

とある。盧溝橋事件が勃発した当初、日本人の女性と結婚した長男一家は日本に居り、三男の銭端禮も日本で勉強していた。その直後、事件による北京各大学の移転で銭稲孫も職を失い、この先の学費を案じて子どもの面倒を岩波茂雄に頼んだ。離れ離れになった家族のことを気にかけてあえて北京の家に残ったのであろうか。また、翌年２月11日付の書簡には、「年賀状さへ差上げずに居りまして失礼ばかり申して居ります　幾重にも御詫申上げ度く存じます　實は昨年の夏からお手紙を差上る筈では御座いましたが　心境のせいかどうしても書けませんので」と記している。事変に伴う銭稲孫の心境変化が相当大きいと見られる。

さらに、事変からおおよそ１年後、三男は日本から帰ってきた。９月30日付の書簡に次のようなくだりがある。

> 先先月の末三男帰省の際　又御丁寧なお手紙とおいしいさかなを頂きまして誠にお禮の申しやうもなくただ〳〵感謝ばかりで御座いますすぐにも手紙を差上たく存じながら小供達が皆あつまりまして話ししたりあそんだり致しまして落付もしませんでした　又端禮帰てから間もなく扁桃腺炎なんか起て四五日も臥せて居りました　五女も耳が悪かったり　朝から晩までごたごたして心では想つて居りながら拙い筆は愈々取れませんでした

三男の帰国と身体不調、五女の耳病などで「朝から晩までごたごたして」いたという。

1939年１月、銭稲孫は「北京大学」の秘書長に就任し、日本支配の臨時政府の下ではじめての役職に就くことになる。その時間的な前後関係からみれば、銭稲孫の就任は家庭の生計状態と無関係とは言い難いであろう。

4.4　捨てがたい図書館

銭稲孫は、北京の図書館所蔵の日本図書が専門に傾きすぎるということ

で自ら泉寿東文書庫を設立し、自分と日本学者の学問研究だけでなく、一般人の閲覧にも便を図ろうとした[44]。設立当初の2500冊の図書にその後の収集で増加した冊数を加えれば、書庫の総冊数は相当な量に達したと推測される。それを放棄してまで北京を離れることは銭稲孫にとって心情的には困難だったのではないかと思われる。

銭稲孫の書庫に加わり、北京近代科学図書館は事変前の1936年12月に日本により設置され、戦中に経営を継続されていた。銭稲孫はそこで日本語講師をするだけでなく、本格的に日本文学の翻訳に従事する機会と場所を与えられた。それがゆえ、日本文学翻訳家として徐々に成長していったのである[45]。彼は北京近代科学図書館の自分自身に対する意義の重大さを認識したのであろう。まして家計の助けになるからであった。

5.「文化漢奸」の「虚」

これまで、戦中における銭稲孫の活動及び、彼が北京に留まり、「対日協力」をした理由をいくつか挙げてきた。いずれも銭稲孫にまつわる具体的かつ客観的な事情から出発して分析してきた。ところが、銭稲孫が「文化漢奸」とされたのは、彼と同じ境遇ではない人が実行した「漢奸裁判」によったものである。後人もその裁判結果だけに注目し、戦中における銭稲孫の心理状態についてあまり注目しなかった。本節ではそれについて銭稲孫と同時期に北京にいた日本人の記述に依拠しながら見ていきたい。

銭稲孫は「満州事変」後、日中関係が緊迫して中国国内で抗日運動が繰り広げられていた時期にもかかわらず、北京に滞在した多くの日本人留学

44）泉寿東文書庫の詳細について、拙稿「30年代の北京における銭稲孫像―日本人留学生の目を通して」（『東アジア文化交渉研究』第５号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2012年２月刊行予定）を参照されたい。

45）拙稿「銭稲孫と北京近代科学図書館」（『河南大学学報』にての掲載受理済み、刊行未定）を参照されたい。

生と若手研究者の世話を焼いた。1933年頃から1年間あまり銭稲孫の家で暮らした目加田誠[46]が記した「銭稲孫先生のこと」によれば、親日家とされた銭稲孫は毎日のように脅迫状を送り付けられたという。また、同文には、中国人の排日運動を恨んだ目加田に向かって銭稲孫は「あなたのような人までそんなことをいうのですか。われわれの中国人の心をじゅうぶんにしっていてくれるはずのあなたが！」と涙を流しながら叫んだ、またある宴会で酔っ払いになり「刀を出せ、早く出せ、おれを死なせてくれ」と暴れた[47]、という事柄が記されている。これらを見ると、銭稲孫は日中両国間の軋轢に対して平気な顔でいられたわけではなく、心理的葛藤が生じたと考えられる。その葛藤による苦しみに堪え切れなかったため、平素温和で穏やかな彼はついに暴れ出したのであろう。

では、戦中において、銭稲孫がどのような心構えで日本人、日本軍と向き合ったのか。事変直後の1937年10月、文芸春秋の特派員として「北支戦線視察」のため北京に渡航した岸田国士は、銭稲孫を訪ねた時に交わした会話を次のように記している。

> 「今度の事変は国民と国民との争ひではないと、両国の政府は声明してゐますが、私もそれを信じた上で今度の旅行を思ひたちました」と、私が云ふ。
>
> 「日本も支那も、この機会に、成すべきことはたゞ二つだと思ひます。即ち、忘れること、反省すること、たゞこれだけです」
>
> 「先生の御意見は、甚だ東洋的で結構だと思ひます。私は、御国の知識階級が殆ど北京を去ってしまったといふ話を聞いて、非常に悲しく思ひました。この状態は永く続くでせうか？」

46）目加田誠（1904-1994）、古典中国文学者、九州大学教授、早稲田大学教授。詩経、唐詩などの著書が多数ある。

47）目加田誠「銭稲孫先生のこと」、『目加田誠著作集8』、龍渓書舎、1986年7月、122頁。

「さあ、わたくしにはわかりません」

「先生はイタリアにもおいでになったさうですね」

「父が公使をしてをりましたから……」

「ずっと北京においでになるつもりですか」

「なんにもすることがなければ、田舎へ引っ込みます。私の眼の前は、いま、真っ暗です」[48)]

銭稲孫は、「盧溝橋事件」に対して「忘れること」と「反省すること」だけを主張し、憤慨と反発を見せなかった。それは本音なのか、それとも日本人の前で強く言えなかったのか、知る術はない。そして進退について聞かれた時に答えた「なんにもすることがなければ、田舎へ引っ込みます。私の眼の前は、いま、真っ暗です」というのは興味深い。「すること」がなにを指しているか不明であるが、「田舎へ引っ込み」は、北京の邸宅と財産を引き払い、故郷の浙江省に戻るということを指すのであろう。つまり、銭稲孫も北京脱出を思慮したことがわかる。「眼の前は、いま、真っ暗です」は、当時の彷徨とした銭稲孫の心理をつぶさに表わしている。

さまよった結果、銭稲孫は北京に踏みとどまることを決断した。それは、日本との交わりを避けられないことでもある。そうして、銭稲孫は「北京大学」の秘書長、学長を務めた。これは「対日協力」的な行動と思われるが、目加田誠の次の文章は異なる見解を示している。

それからわたしは帰国し、まもなく日支事変になった。昭和十七年のころ、ちょっと北京に行ったが、そのおり、チェン氏（引用者注・銭稲孫）は北京大学の総長になっていた。一日チェン氏をたずねると、氏は、いま日本軍が中国に侵入してあばれているが、これはとなりの悪童がこちらの庭に入りこんで荒らしているようなもので、今に疲れ

48）岸田国土「北支物情」、『岸田国土全集22』、岩波書店、1990年、322-323頁。

てひきあげるでしょう、と言っていた。とうじ、北京に来ていたある日本の文化人が、わたしに言ったことばに、「チェン・ダオスンをたおさねば、北京大学は日本のものにならぬ」と。この人物は戦後日本で、民主主義の本家のような顔をして、いまも活躍しているが。

たしかに、日本の軍部などは、チェン氏をおさえつけようとしたのだ。しかし、チェン氏にしてみれば、日本と親しい自分がこの際出て、日本人の中国文化破壊にたいして身をもって防波堤となろうとしたことはあきらかである。このときにあったチェン氏ほど苦しい表情をしていたことはない。しかし、時流にのったものとして、悪口をいう人は多かったのである。[49)]

これによれば、銭稲孫は当時、日本軍の中国への侵入を「となりの悪童がこちらの庭に入りこんで荒らしているようなもので、今に疲れてひきあげる」ことと見て、日本軍の侵略の意味を十分に認識しておらず、日中戦争の長続きも予想していなかったようである。

しかしながら、「チェン・ダオスンをたおさねば、北京大学は日本のものにならぬ」という目加田誠の記述は、銭稲孫が日本と親しい立場を利用し、北京大学を守って日本人の中国文化破壊を阻もうと努力していた、ということを示している。目加田誠は銭稲孫に世話になったため、彼の戦後の境遇を憐れに思い、文章に多少感情が移入された扇情的部分があるが、信憑性がないとは言えない。

たしかに、1937年８月、北京に残った清華大学教員によって結成された「国立清華大学保管委員会」には、銭稲孫は図書館の保管員として加入している。また、10月に北京大学、清華大学、南開大学の教員たちが最後の機会で南下しようと天津に集めた時、銭稲孫は天津まで追いかけ、北京大学

49）前掲目加田誠「銭稲孫先生のこと」123頁。

教授の鄭天挺[50]に学校のことを考えて北京を離れないように願ったという[51]。そこから、銭稲孫は学校のことを案じたことがわかる。これも彼が北京を離れない一つの理由であろう。

また、「北京大学」図書館長は一時周作人であったが、「周氏は執務せず、主任という役職も欠如しており、実質に大権を行使したのは秘書長の銭稲孫である」[52]。言い換えれば、終戦まで「北京大学」図書館は銭稲孫の手によって運営されていた。彼は元北京大学、清華大学図書館の蔵書の整理、接収に取り組んだ。そのため、「北京大学」図書館の存在意義について、「仮に存在しなければ北京大学図書館の蔵書と設備は淪陥後ほとんど略奪されて取り返しのつかない被害を受けたであろう。北京大学図書館の保存と維持という角度から見れば、日本支配時代の「北京大学」図書館の存在には一定の意味がある」とのように、肯定的な部分も認められている[53]。「北京大学」図書館の肯定的な評価を得るには、銭稲孫の功績はもっとも大きいと言えるであろう。事実、戦後、点検したところ、北京大学図書館の図書は少々増加していた[54]。

50）鄭天挺（1899-1981）中国近現代歴史学家、教育家。日中戦争時に西南連合大学の総務長を務めた。

51）韦慶媛「図書館的另類館長銭稲孫」（『読書』第377期、生活読書新知三联出版社、2010年10月、95頁）に「据郑天挺的儿子郑克晟回忆，当北大、清华、南开最后一批教授齐集天津南下联络站时，钱稻孙追到天津，对郑天挺说：“你不要走，你应该考虑考虑学校啊，你走了之后，学校怎么办？”」とある。

52）周氏并不到馆视事，馆中主任一职，亦付阙如，一切行使大权，均归诸北大秘书长钱稻孙氏之手。（前掲韦慶媛「図書館的另類館長銭稲孫、96頁）

53）北大图书馆吴晞所言：“沦陷区的‘北京大学图书馆’成立后，在整顿图书馆工作、维持馆藏图书方面起到了一些作用。尽管它是日伪政权下的一个机构，后人也常常冠之以‘伪’字，但如果没有它的存在，北大图书馆的藏书和设备在沦陷后必将会被劫夺殆尽，蒙受永远无法弥补的损失。从保管维护北大图书馆的角度看，日伪时期‘北大图书馆’的存在还是具有一定意义的。”（前掲韦慶媛「図書館的另類館長銭稲孫、96頁）

54）「国民党政府最高法院对周作人案的復判」に「本院查申请人与已故冯祖荀孟森马裕藻等于华北沦陷北大西迁时受校方委托保管迨复员后点查校产及书籍尚无损失且稍有增加」と記している。（張菊香、張鉄栄編『周作人研究資料上冊』所収、天津人民出版社、1981年、158頁。）

このように、銭稲孫と実際面会し、生活した人たちによって記された銭稲孫像は、歴史的な記述によって判断された銭稲孫のイメージとすこし食い違いが見られる。両方の見方を考え合わせると、戦前から戦中にかけて、銭稲孫は決して最初から快く日本に協力しようとしたのではなく、内面の葛藤があった。そして「対日協力」と見なされた活動の裏にも、彼なりに中国人のなすべき役目を果たそうとしていたといえるのではなかろうか。その後、エスカレートしていった戦争の展開を見れば、銭稲孫は時代を見通す力が欠けていたとも言えなくはないが、日本をよく知っている自分が踏ん張ることで、侵略や中国の文化破壊の歯止めになると考えていたのかも知れない。

6. 結び

このように、本論において日本占領下の北京における文化人のひとりである銭稲孫を取り上げて、「更生中国文化建設座談会」、大東亜文学者大会という二つの事例を中心に、戦中における彼の言動を追究し、北京に踏みとどまり、日本へ協力した理由について分析を試みた。その結果、銭稲孫は日本主催のこれらの活動に顔は出したが、座談会での当たり障りのない発言と、文学者大会での日本の優等生的な態度に反発的な発言をしていたことがわかった。つまり彼は日本主催の会合に対して真剣に取り組んでいなかったのである。彼があえて北京に残ったのは次のような理由があると考えられる。そもそも青少年期の日本留学によって日本に対して親近感を持つ上に、戦前において日本外務省から種々の補助費を受けたため、日本と親密な関係を築いた。岩波茂雄宛の書簡から窺えた家庭の係累や、長年の収集を通じて設立した泉寿東文書庫と、北京近代科学図書館での翻訳活動に対する未練もあっただろう。一方、戦中の銭稲孫を実際出会った人物の記した資料によれば、彼は日中関係の破局によって心境に変化を見せ、田舎に引っ込むことも考えたという。激烈な葛藤を経た後、北京に居残る

ことにしたが、日本支配下の「北京大学」で、役職に就きながら、自分なりに北京の図書を守るのに邁進した。

本論は、日本占領下の北京における文化人を客観的に研究していこうという試みの一つである。したがって、筆者は本論において銭稲孫を扱ったが、彼の行為を裁いたり弁明することを目的としない。彼の名誉のためというよりは、むしろ彼に代表される日本占領下の北京における文化人の生活や心理状況を、これまで見過ごされた細部について日中両方の資料を突き合わせて見ることによって明らかにしたい。これは、当時の文化人、学界における必要な研究であり、戦後まで続く文化界の歴史、および日中両国にまたがる文化人のアイデンティティへの考察に示唆を与える研究となるであろう。

最後に、魯迅研究家の孫郁の言葉を引用して結びとしたい。

> かつて、ある研究者はより高い立場から対日協力者のために弁解しようとした。しかし、民族が存在する限り、根本的な正邪問題がささやかな正誤問題に変わることはない。自ら喜んで敵に仕える場合はさておき、苦悩を抱えたといい、本心に逆らって我慢したというも、敵に仕える以上、恥じるべきで弁解しようはない。われわれは世界の平和を祈りながら、二度とないように教訓を銘記しなければならない。同時に、体裁の悪いこの時期の歴史を整理、研究しなければならない。[55)]

付記：本論における岩波茂雄宛銭稲孫の書簡の紹介は、所蔵者である岩波書店

55）曾经有人站在似乎更高的立场，试图为事敌者说辞。殊不知只要民族还存在着，大是大非就不会降低为小事小非，更不会降低为无所谓。且不说甘心情愿，另有隐衷也好，委曲求全也罢，事敌即应觍颜，无以辩解。我们一面祈祷世界和平，一面必须吸取教训，使这样的惨景再不要发生，一面也有必要整理和研究一番这几页不光彩的历史档案。（「序言」、孫郁、黄乔生編『回望周作人 資料索引』、開封：河南大学出版社、2004年、７頁）

の許可を得た。また公開に際しては銭稲孫の遺族に格別のご配慮を賜った。記して謝意を示したい。